

# 腹部CT診断学

(改訂2版)

藤田 信行 中外医学社 2000/12 出版

19cm 473p

[B6 判] NDC 分類:492.434

販売価:¥15,750(税込) (本体価:¥15,000)



《内容》CT診断の基本となる解剖と病態生理にこだわり、画像所見のとらえ方、考え方を系統だて、しかも明快に理解できるよう詳解した腹部CT診断テキストの決定版。ヘリカルCTの導入に伴うCTの新たな展開はもとより、最新の文献まで視座に入れて従来にない切り口で臨床に必要な情報を網羅している。実例を多数盛り込んだ懇切な入門書であると同時に、経験豊富な専門医にとっても新しい見方を得ることのできる書である。

序 腹部CTのテキスト執筆の依頼を受けて3年が経過してしまった。私の怠慢が大きな原因ではあるが、その他にもいろいろの要素が噛み合っただけで予想より約1年半の遅れとなってしまった。理由の最大のものはこの3年間にみられたCT機器の大きな進歩、つまりヘリカルCTの導入であり、それに伴うCTの新たな展開である。執筆開始当初にはわれわれの施設においてはまだヘリカルCTは導入されておらず、原稿はヘリカルCTを全く視野に入れずに作成されていた。さらに使用する写真はそれ以前に使用されていたCT機器によるものを用意していたが、新しい機器による画像があるものは可能な限り新しい機器による写真と切替えた。この作業に約半年を費やした。

さらに驚いたことに、教科書に記載すべきレベルの話には新たな知見はないものと思い込んでいたが、新たに出版される論文に目を通していると執筆時点では不明であった事項が明らかにされていたりする。執筆中あるいは終了後の論文はほとんどこの視点で読んでいたような気がする。初校校正まで6カ月のインターバルがあったが、その間にも新たな文献の追加があり、初校校正ではかなり文献に手を入れた。

弁解はここまでとする。私がこのテキストを執筆するにあたって原則としたのは以下の5点である。

1) 画像を理解するのに必要な知識は解剖と病理と病態生理である。可能な限り実例に即し理解できるように記載したつもりである。

2) 病態生理学的事項に関しては「解説」の項を設けて詳述した。

3) CTを含め、画像診断所見は臨床的に利用されて初めて意義をなす。その所見を共通語で記載し、臨床所見ときちんと対応させる必要がある。その共通語は癌取扱い規約であり、規約と、それに対応する画像所見を詳述した。

4) ヘリカルCTに関して若干述べたが、3Dに関しては一切記載しなかった。CTはヘリカルCT、3DCTのみではない。基本は本テキストに示した解剖、病理、病態生理である。今後もこのようなテキストはその必要性を失うものではない。

5) MRI普及の今、骨盤領域ではCTは不要とされている。著者も同意見だが、MRIはまだまだ十分な普及を示してはおらず、CTで検討を行わなければならない施設も多い現状では、子宮癌、子宮筋腫、他の記載を飛ばすわけにはいかなかった。むしろ記載が必要以上に長くなったとの印象もあるが、真意はここにある。

いずれにしろCTはまだまだ画像診断の中心をなす重要な検査法である。その有効な臨床利用に、この小著が役に立てば著者の幸せである。